

松尾南の原遺跡発掘調査概報

1972・1974

三菱電機株式会社中津川製作所
飯田市教育委員会

松尾南の原遺跡発掘調査報告

I. 環 境

1. 自然環境

長野県飯田盆地は東に赤石山脈、西に木曾山脈が連亘し、この中間を天竜川が南流し、その両岸に見事な河岸段丘が発達している。飯田市松尾地区(旧松尾村)は飯田市街地より南町を問においたすぐ南にあり、天竜川西岸に天竜川より幾段もの段丘があつて次第に西方に高まっている地形にある。遺跡の所在する南の原は伊那谷段丘の第3段丘面にあって、標高490m⁽¹⁾、天竜川との比高10mを測り、松尾地区では最も高い段丘面にある。

遺跡の西方はさらに上位の名子熊段丘面があり、高差10mとなっている。また、東方は一段低い御射山面があり、ここには三線精機工場がたてられ、高差30mを測る。それより下位の第7段丘の毛賀の源訪神社面、さらに小さな段丘面があつて、綠ヶ丘中学校のある毛賀の沖積段丘面となり、さらに下位の清水面となって天竜川氾濫原へと続いている。

南の原は東西450m、南北1000mに及ぶ広い段丘面で、北500mに飯田女子短期大学があり、さらに北へと八幡原がつづき、名古熊の低い面へと連続している。しかし南は、北の沢が流れ、名古熊面では浅い浸蝕を見るのがあるが、南の原面では急に深い溝谷を形成し段丘面を切り、この沢を距て南に松尾小笠原氏の根拠であった松尾城跡がある。その南は毛賀沢川の深い谷を距て鈴岡小笠原氏の本拠であった鈴岡城跡が対応している。

南の原の地形をみると名古熊段丘崖下は片羽の基壇が南北方向に並び、そのまま東側は東西巾約50mの低地となって南北方向の水田帯となり、南端は北の沢へと落ちている。水田帯の下層は厚い砂層となっているところで古い河床であったとみられる。この水田帯以外の東側は一見平坦な桑園となっているが、この平坦面を詳細に観察すれば、水田帯の低地からすぐ東側は緩い丘陵状をなし、さらに東にいくに従い低くなり、台地の中央部はやや凹地状となり、これより東にいくに従い僅かながらも高さを増して段丘堆地に達している。

発掘調査によれば、水田帯から東150mのトレーンでは厚さ60cmの植物遺体を含む粘土質の堅い堆積層があり、東段丘端部から西150mの工事中の観察では深い粘土質の黒土の堆積がみられている。中央部の凹地状部と、西側の高地部とは130m、東段丘端部とは50mのレベル差をはかる。この凹地状部は耕地整理前は雨期には所によって水が溜り歩行も困難し、農耕の不適な場所であったといわれている。東西巾90m、南北方向については未調査であるが、広い範囲にわたる湿地帯、または、長い期間にわたっての沼の存在が推定される。

2. 歴史的環境

南の原は島居電線の「先史及び歴史時代の下伊那」によれば、上位名古熊段丘面とともに縄文時代の遺物分布地となっており、今まで石斧や土器片の採集が報せられている。発掘調査前の分布調査では縄文時代、弥生時代の打石器が表面採集され、中世陶器片も発見されているが、昭和42年3月の遺跡台帳には誤って落されていた。



図1 松尾南の原遺跡位置図及び周辺の関連遺跡 (1 : 30,000)

南の原の一段低い御射山では縄文中期の甕が出土しており、一段高い名古屋の行人塚よりは縄文土器と炉址が発見されている。本遺跡の西方400mの名古屋高位段丘面の端に地藏堂古墳があり、北東600mには代田山第2号墳がある。

ここで特に注意したいのは、北の沢を跨てた段丘の端に松尾城跡のあるところである。中世信濃ととなった小笠原氏の本拠地である。本城の起源については正確なところは判明しないが、少くとも南北朝時代には存在していたことは明らかである。その後しばらくは伊那盆地における中心的な城であり、天正18年(1590)小笠原信儀が武藏本庄へ転封された時までつづいた。

この間、同族の直親関係にある松尾小笠原・鈴岡小笠原との間に信濃守護職をめぐる対立が深まり、推定永享2年(1493)に松尾は鈴岡を襲って破り、落城させているが、この後鈴岡の残党、松本源氏小笠原、下条氏の連合勢力の攻撃を受け、しばしば合戦に及んでいるが、その圧迫にたえず、松尾小笠原は甲斐に身を寄せ、再び松尾へ復帰したものとみられる。²⁾この対立時期には松尾城周辺においても戦火が交わされたと考えられる。今日、本曲輪、二の曲輪、三の曲輪の跡、空堀が残存し、中世の平山城の姿を収容している。本遺跡の西50mを南北に通る道は片羽道と呼ばれ、飯田市と南町の境をなしているが、この道は中世においては城に至る追手の道であったと考えられている。

注1 松島信幸「伊那谷の段丘」1966 下伊那地質資料2

注2 吉下譲 「下伊那史第六卷」昭45 下伊那誌編纂会

本稿は大沢和夫の原稿をもとに調査結果を加えたものである。

II 発掘調査経過

昭和47年に松尾南の原に三菱電機株式会社中津川製作所飯田工場が建設されることになった。この南の原は、鳥居発掘の「下伊那の原史及び先史時代」(大正13年)にはアイヌ派厚手土器の分布地となっていた、今まで縄文時代の土器、石器が採集されていたところである。しかし、昭和42年3月発行の、「遺跡分布図、長野県」には、記してある原の遺跡群が落書きされていた。このため地質買収後の分布調査によって縄文時代、弥生時代の石器が表面採集され、中世陶器片も発見され、遺跡として飯田市教育委員会は、工事着手前の発掘調査を工場側に要請し、1972年3月21日より4月6日にわたる14日間の発掘を実施したものである。用地面積は7haに及ぶ広範囲であり、費用、期日の制約で、遺物採集が多く、地形的にも好条件である用地の西端部の水田地帯に接する南北100m、東西36mの地点を調査区とした。(図2)

調査結果では中世屋敷跡、住居址、火葬墓跡、土塙墓が発見され、中世陶器の数多くと、茶臼等の遺物があり、重要遺跡とみられた。しかし、その報告は佐藤が「日本考古学年報25(1972年版)」にその概略を載せたのみで、中世屋敷跡と、中世陶器の十分な把握がなされず、それに次から次の緊急発掘調査に追われ、今まで運らせた怠慢の扱いはまぬがれない。

昭和49年度には工場拡張計画により、現工場地の北側に東西120m、南北25mの区域に新しく工場が建設されることとなり、その発掘調査は1974年8月17日から開始したところ、この調査中、計画外の用地の西端部の一画に工事用資材置場の建設のためブルトーザによる整地がはじまり、この地区をB調査区、前地区をA調査区とし(図2)調査を引継いで行ない、9月19日までの28日間の調査となった。この

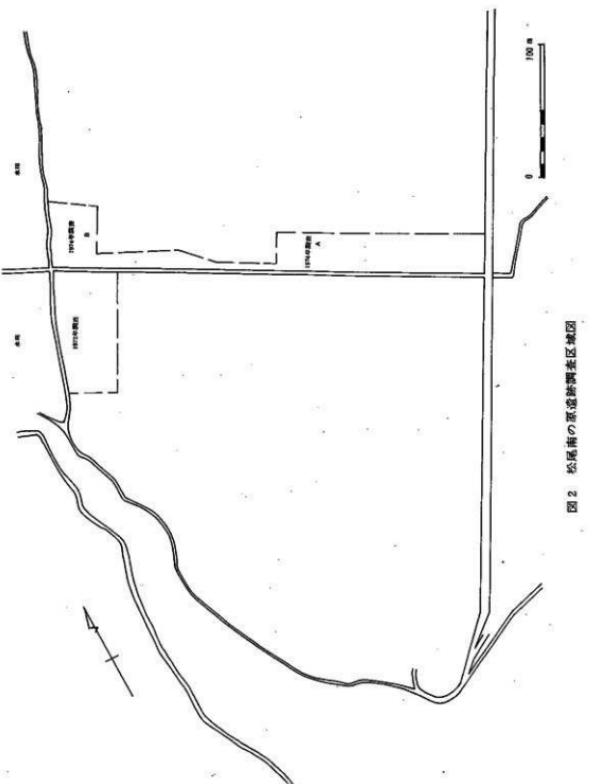


図2 番号標記の原図(発掘調査区画)

間残存のきびしさと、台風14号の豪雨にもあい、調査は苦労を重ねた。

この調査によって72年度調査による屋敷跡との関連遺構が発見され、予想外の成果を上げ得ることができた。さらに75年、76年にわたっての工場建設計画があり、その発掘調査によって松尾城跡との関連をもつ中世の城郭外における施設に対して、ある程度の明確がなされるものと期待される。

本報告は、1972年、1974年の二次にわたる発掘調査の概報であり、次いで行なわれる、75、76年度の調査完了時に総合報告を予定しており、発掘調査日誌を略す。

III 調査結果

I. 1972年の発掘調査

発掘調査された遺構は(図3)、いずれも中世の屋敷跡1、住居址2、土塁10、火葬墓群1である。

(1) 屋敷跡(図4)

4棟の建造物からなり、床面は全面に焼土が広がり、その区画をなしていた。この4棟を発掘段階では、東側の発見順に1号～4号住居址と整理してきたが、一連のものとみて中世屋敷跡としたものである。

1号は南北5.4m×東西6.3m、東側は浅い掘りこみとなるが西にいくに従い平坦となる。東側に南北方向に土台石が2列に3こずつ並び、西側は獨立柱となる。2間×2間の建物であるが、東側には床、南側には廊下が付く座敷風の建造物とみられる。遺物は中世陶器を僅に検出したのみである。

2号は、1号より一段低い位置にあって、東西約5m×南北6mの2間×3間の建物とみられる。南寄り中央に1.8m×1.8mの圓炉窯が掘りこまれ、この北に接して、これより古いとみる1.8m×1.2mの圓炉窯が掘りこまれていた。前者の中央より北に天目茶碗の完形品、後者の北隅に白茶の完形品が埋められた状態で出土をみた。2号の南端の中央部から径1.1mの円形は南側にえぐりこむ深さ1.2mの貯蔵穴とみるものがあり、この中より常滑の青瓷片が数多く出土している。2号は遺物は多く、すり鉢、皿、天目茶碗片、内耳土器片が数多く検出されている。

2号の北に接して3号がある。南北3.6m×東西3.5m、深さ96cmと地下に掘りこまれた建物で、この覆土は、焼けた焼土(土間にわらを切りこむ)が重きなり、焼け落ちた状態を示すもので、床面には多くの木炭と焼木がみられた。内部は南側壁側には、人頭大の石が並び、壁はゆるい傾斜をもって出入口をなしている。他の3方の壁はほぼ垂直となり、壁にそって巾10cm～20cm、深さ10cmの周溝がめぐる。中央より北により焼土があり、この上に石臼の下部が置かれ、皿4枚が重ねられて出土している。この他遺物には小柄が検出されている。

4号は2号の面に並び、6.3m×6.3m、3間×3間の獨立柱の建物である。柱穴間隔は1.8m・2.7m(1間・1.5間)となっている。出土遺物には、すり鉢、天目茶碗、皿、常滑の青瓷等の陶器片と茶葉土器内耳土器片がみられている。

(2) 住居址(図3)

屋敷跡より南67mに中世の6号住居址、これより5m南に5号住居址がある。

5号住居址は南北3.5m×東西4.2mの長方形の浅い竪穴住居址で主柱穴は4つとみられる。東側にお

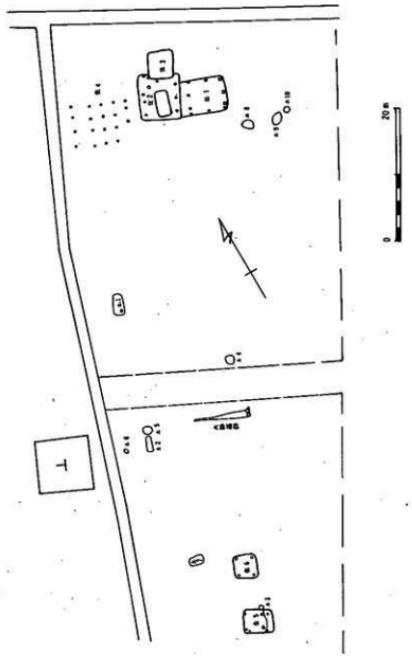


図3 松風町の底質調査点分布図 1972年調査結果

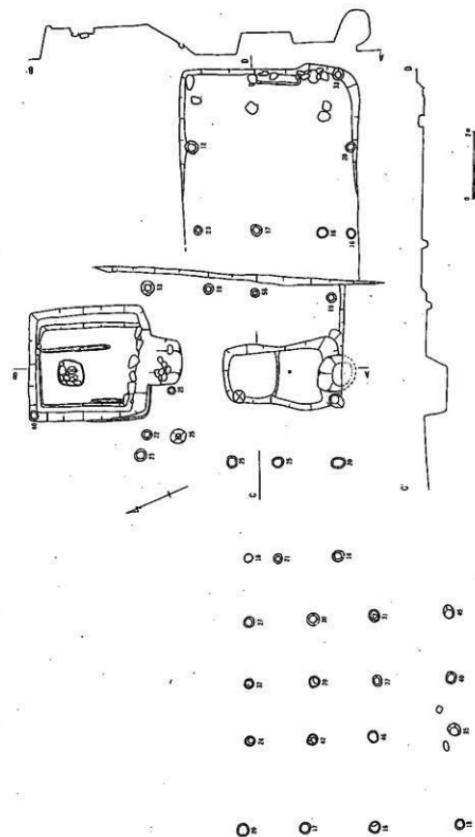


図4 松風町の底質調査点分布図 1号

すかに高い面があり、その西側の南寄りに炉址とみる焼土をもつ掘り回みがある。遺物にはすり鉢、内耳土器片がある。

6号住居址は、南北3.4m×東西3mの壁高20cmの堅大住居址で、主柱穴4孔をもつ。遺物は天目茶碗片、皿片、内耳土器片、鐵器片の出土をみている。

(3) 土塁墓(図3)

1号～10号の土塁が調査された。これら土塁のうち1～1.5m×2mの大長方形となるものと、円形または不規則な橢円形をなす土塁の2形態がある。前者は明らかに土葬墓とみられるものであり、後者には火葬墓と考えられるものもある。遺物の出土をみたのは6号土塁のみで、天目茶碗片、内耳土器片、すり鉢片等が数点、フィゴ1が検出されている。

(4) 火葬墓群(図3)

墨敷路の南45mに東西方向に長さ8m、巾は東端部では2m、西端部は35cmとなるが、約70m～100mの巾に浅い掘り回みをつくり、この上に拳大から人頭大の石を所によっては多く詰め、また、僅かに僅かに高く程度の所もあり、木炭と火葬骨灰が全面的にみられ、西側には焼土で壁が堅められていたり、觀察された。最終的には11の火葬墓よりなると推定され、いずれも浅い土坑を掘り、①内部に石を詰めるもの、②土塁のみのものの2形態の火葬墓が看取された。遺物は、上層の石の間にみられたものが多く、天目茶碗、すり鉢、皿、常滑窯の破片と内耳土器片、素燒土器、鏡の石突1が検出されている。

2. 1974年の発掘調査

本次発掘調査はA・Bの2調査区について行なったものである。南の原台地の片羽への道の北側、東西315mの間を、A区では台地の東側より東西130m、南北20～30mについて、B区では台地の西側より東西115m、南北広い所は45m、狭い所は5m内外に対しての調査である。(図2)

発掘調査した遺構(図5～6)は、東西方向の溝道路、その北側を平行する路基または土塁址ともなるもの、柱列、住居址3、土塁14、ピット群1、この他台地の中間部に東西約90mにわたる沼状跡が認められた。(図7)

(1) 溝状遺構

古地の中央部の沼状跡をはさんで東(溝I)と西(溝II)に、東西方向に溝が掘られ、さらに南北方向の溝田がある。

溝I(図5・8)は、沼状跡の東端部から東へ約50mのびた所で南に向きを変え、さらに南東方向へ緩いカーブを描いて段丘端から崖面斜傾部へと続いている。溝は沼状跡に接した第4トレンチでは、1m幅での巾1m、深さ20cmと浅く、東にくるに従い大きさを増し、南にガーブする地点では、巾2.5m深さ115cmとなり、薬研堀とみる形状となる。

溝II(図6・7)は、沼状跡の西端部からは直線状に西の水田地帯にまで延びるとみる溝で、沼II跡に接する第12トレンチでは巾1.8m、深さ40cmの溝とこの北80mに巾1m、深さ20cmの溝が並ぶ。この調査は片羽部落へ通ずる道路段となり、このため十分な調査はできなかった。第8トレンチでは、巾1.4m、深さ30cmの溝とこの北に小さな溝が2条みられている。溝IIの調査は不十分ではあるが、溝Iに比し、規模の小さなものとみられる。

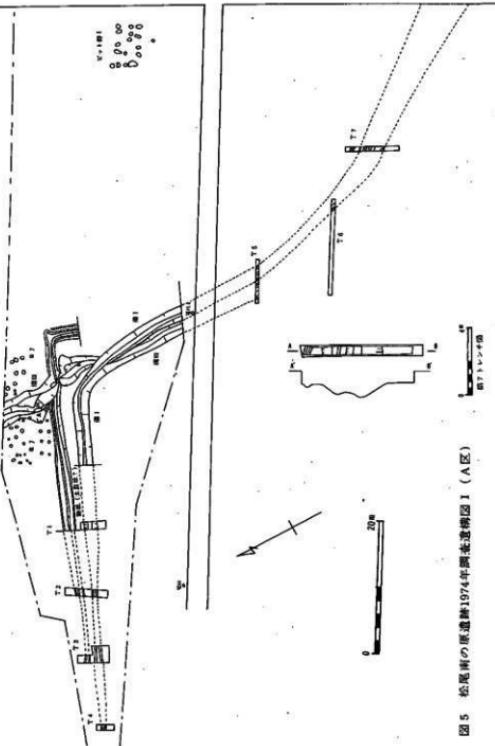
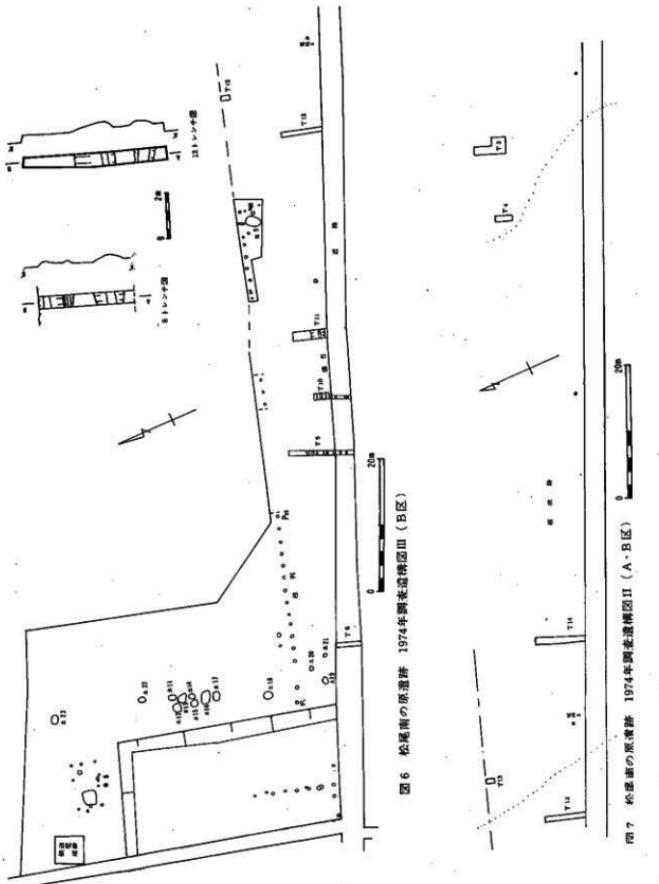


図5 1974年調査時の遺構(1)(A区)



溝ⅠとⅡの共通点は、沼状跡をはさんで東西方向にあり、その北側に道路址、または土塁址とみるマウンドをもつこと。溝底部は水の流れた痕跡、また水の溜っていた痕跡をもたないことがある。

溝Ⅲ(図5・9)は、北側は来年度の調査に待たねばならぬが、北から南に向かう、溝Ⅰが南にカーブする地点で切られ、溝Ⅰの西側を平行しているが、溝Ⅰによって東側は削られている。巾2~2.5m、深さは70cm内外のものである。第5トレンチでは、その存在は確かめられたが、それより南は工場敷地のため整地され、十分な調査はできなかったが、トレンチ調査では、その存在を認めるおとはできなかつた。

溝内の遺物には、溝Ⅰより茶臼の上臼、永楽通宝をはじめ、天目茶碗、皿、すり鉢片等の出土をみており、溝Ⅱでも同系統の陶器片があり、第14トレンチの沼状跡より青磁の皿の出土をみている。

(2) 路址。または土塁址(図5・6・8)

溝Ⅰ・Ⅱの北に平行して両側より土を巾50cm~70cm前後に盛り上げたものである。高さは現状では両側で20cm余、北側で10cm程度であり、南側には礎石がはいつておらず、堅く側面をしめている。溝Ⅰが南にカーブする地点で同方向のカーブを示す。段丘崖下からの古い道がこの辺りを通って耕片羽へ通じていたといわれるが、その古い道へ通ずる痕跡はカーブする所でそれより東は断続している。形に折れているとすれば路址であるが、その痕跡は調査段階では発見できなかった。巾から考えれば路址であり、溝との間違からみれば土塁址と考えられ、土塁とすれば規模の小さなものと推定される。

(3) 柱穴列(図6・7・10)

溝Ⅱより北約5m離れて、それと平行して一列に柱穴が並ぶ。部分的な調査に終わったが、水田地帯より東20mは、かつて水田造成のため造橋は破壊され不明であるが、それより東70mにわたって柱穴が認められている。柱穴間隔は1.8m(=1間)が主で、これより短い間隔も僅かにみられる。深さは40cm以上が多く、8cmと浅い特殊なものも1こある。これら柱穴の並びからみて構と考えたい。

(4) 住居址(図5・6・11)

溝Ⅰが南にカーブする北側に7号、水田ぎわの小高くなった所に8号、沼状跡の西に9号住居址がある。

7号住居址(図8)は南北6.5m、東西19mに柱列と圓炉裏跡2こがある。柱列は正しく通らないものもあり、壁骨または幾種かよりなる建物跡とみられる。住居址の中央部は溝Ⅱを埋立しており、圓炉裏址はここに造られている。張床面を最初に部分的に壊す誤りも犯した。規模からみて屋敷跡の一部と考えられるもので、北側の来年度の調査を待つものである。遺物には天目茶碗、皿、すり鉢等の陶器片と内耳土器片がある。

8号住居址(図11)は南北4m×東西7mに3間×3間の建物である。柱穴間隔は約1.8mと4.5m(2.5間)。西側中央部に1.8m×2.3mの隅丸方形の浅い掘り込みがあり、中に人頭大の石が配せられているが、何であるか把握できなかった。遺物は少なく、鐵鋤、内耳土器片の出土をみたのみである。

9号住居址(図6)は柱列の東端にある、沼状跡に隣接している。南北は疊土、北は76年度調査区、また湧水が多く十分な調査はできなかった。西側に2m×1.5mの精円形をなし、深さ70cm、湧水で調査不十分であり、さらに深くなるとみられる貯藏穴があり、南側へ深くえぐりこむものである。遺物には輪皿、内耳土器片、砾石、鐵鋤等がある。

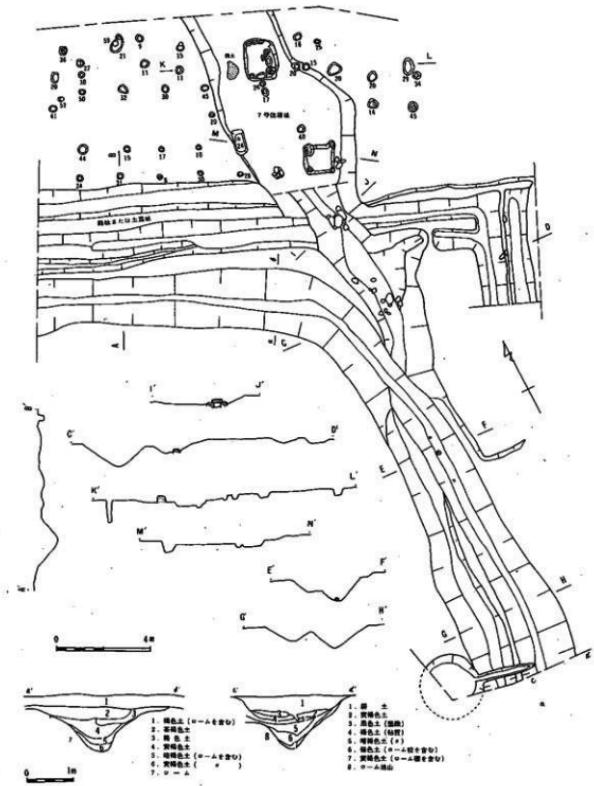


図8 松尾南の原遺跡東溝の中心部と7号住居址

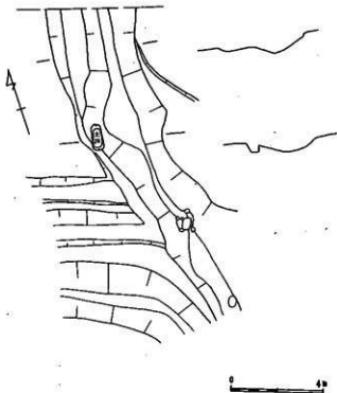


図9 松尾南の原遺跡溝Ⅲの北溝図

深さ20cm前後のピットが16コ方形に配せられ、建造物跡とも考えられ、また土塁ともみられるが、遺物ではなく、その性格を把握するにはいたらなかった。

(5) 土 塁 (図5・6)

A区では24号、B区では南北方向に並んで11号～23号が発見されている。形態と、内部に木炭を多く含むことからみて火葬墓と考えたいが、火葬骨、骨灰を検出したのは20・22・23号のみである。遺物は12・16・18・19号ではなく、他はいずれも上層部に内耳土器片が置かれていた。内耳土器だけをもつものに11・13・15・17号があり、20号にはフイゴの小破片が多量に検出され、12・14号は良質な天目茶碗、すり鉢、その他の陶器片の出土をみている。

(6) ピット群 (図5)

A区の東端部に発見され、南北3.8×東西6.4mに亘40cm～70cm,

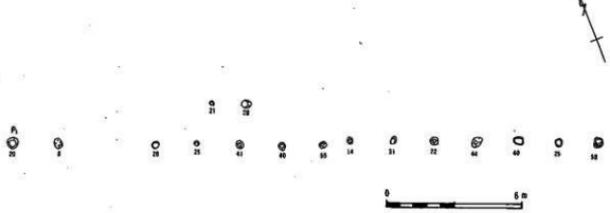


図10 松尾南の原遺跡柱列址 (1:60)

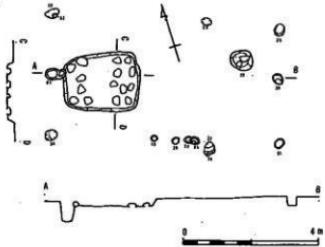


図11 松尾南の原道路8号住居図

2. 遺 物

(1) 中世の遺物(図12~15)

1972年、1974年の二次にわたる遺構出土遺物については差を見出すことはできない。同一系統の陶器の出土をみており、遺構別でなく、全遺構が間通性をもつものとして、ここでは遺物をとりあげることにした。

常滑窯(図12の1~3) 大部分は屋敷跡に多く、特に貯蔵穴からは大破片が多く出土しており、火葬墓群からも出土している。口縁部の折りかえし部分が肥厚して接着するもので、図12の2の肥厚大きい。信長の天正2年(1574)の常滑禁窯令の直前の古常滑焼末様式のもので、室町時代後半に位置づくダグア胎様式と呼ばれるものである。押印をもつ(図12の4)の2片があり。同時期のものである。南の原屋敷跡の時期を知る手掛りをなすものと受けとめたい。

天目茶碗(図12の5~11) 図12の5は、屋敷跡掘出し裏の中に埋められて出土した完形品、口径12.5cm、高さ6.5cm、内面底には文様とともに文字ともみる刻みがあり、緑色を呈すすばらしい逸品である。屋敷跡よりの天目茶碗は6・10・11があり、6は火災による二次変化を呈す。8は6号住居址、9は7号住居址、7は12号土塁よりの出土、10・11はアメ天目、他は黒天目である。これ等の他天目茶碗の小片の量は多い。

すり鉢(図13の2~6) 小破片は多く出土をみており、特に屋敷跡よりの量が多い。図13の2・4と1の盃はピット内に重なって出土したものである。2はほぼ完形に復元されている。いずれも鐵鉄を盛っただけのうすい施がかかり。底部は糸切底である。小破片も同系統のもので、時間的にも大きな差はないといふられる。

皿(図12の12・13、図14の4~25) 屋敷跡の倉庫床面よりの出土が最も多く、溝I、IIの底部からの出土も多い。図12の12は沼状跡の粘土の堆積より出土し、波状口縁をなし、内面に唐草文、底部には龜甲文とみるものが描かれている。良質な青磁で電車窓とみられる。図12の13は9号住居址出土の繪花皿。図14の4は内面に花瓣状に沈線が施されており、黄瀬戸系である。その他もいずれも良質な皿で、48

鉢類がたっぷり施され、瀬戸周辺のものとみられる。図14の2は、乳白色を呈し、他の胎土がやや質味をもつたにいし、白い色で窯址の異なるものとみる。図14の19・20は火災による二次変化がみられる。

盃(図13の1) 盃の破片は多いが、図示できるのは、この1こで、鉄鉢の美しい良質なものである。茶入(図14の20) 屋敷跡の出土で、鉄鉢の美しいもので、糸切底に高台を不規則につけている。

内耳土器(図14の1~3) 住居址、土塁より出土をみており、小破片の量は多い。図14の1は土塁16号、2は溝II、3は土塁16号出土である。

素焼土器(図14の17~19) 17は住居址6号、18は火葬墓群、19は屋敷跡よりの出土で、いずれも糸切底、胎土は砂質粘土で焼成は堅い。

鉄器には図14の21~23があり、21は屋敷跡の床面より出土した小柄、22は鉢の石突、23は釘で、火葬墓群よりの出土である。

古鏡 図14の24~26があり、24の水永鏡(1408年明成祖)は溝Iの底部に茶臼2号と併出している。25は寛永元年(1628年宗神)で、74年調査の土塁墓群より出土している。同地点出土の26は不明である。

茶臼 図15の1の茶臼1号は屋敷跡西側裏内に埋められていた完形品で見事なできばえのものである。2の茶臼2号は上臼だけが溝Iの底部に水永鏡と併出した完形品である。いずれも砂岩製で精巧な仕上げである。

石臼 図15の3・4は、3が上臼、4が下臼で安山岩製であり、現在見る石臼とは形状が異なる。
砾石 図15の3があり、9号住居址出土である。

(2) 繩文時代、弥生時代の遺物(図16)

弥生時代の石器が図16の1~3があり、1の石鋤は硬砂岩製で1010gと大形である。2は蛤刃形磨石1枚、3は打製石刀包丁であり、1、2は溝Iより、3は屋敷跡周辺よりの出土である。繩文時代の石器に図16の4~7があり、5の石槌の他は打石斧で溝I内部よりの出土が多い。

ま と め

1972年、1974年の二次にわたる調査は工事用地の広範な面積の一帯で終わらなかったが、発見された遺構は中世松尾城跡に隣接する武士団の屋敷跡、北側にそれに伴う溝Iでは明らかに蒸窯場があり、これに平行する土塁址または路跡とこの北に並ぶ欄列があり、これらが台地中央部にある沼状跡をはさんで東西の間に構えられた屋敷跡に付帯する住居址があり、この周辺に火葬墓群、または土塁墓がある。

1975、1976年度の工事用地の発掘調査によって、これら中世家臣団の屋敷跡、これに伴う防護施設が或る程度解明されるものと予想される。

遺物からみて、茶臼、天目茶碗をはじめとする見事な陶器の出土は室町時代後半における松尾小笠原氏の重要な家臣団の居がここにいたものと受けとめられる。

弥生時代の石器 繩文時代の石器の出土はここに、この期の遺構の存在することも予想され、今後の調査に大きな期待がもたれる。

本調査にあつては飯田女子短大の大沢和夫先生、県文化課今村春吉指導主事、調査員として御骨折りいただいた今村正次先生をはじめ作業に従事された方々に深く感謝の意を表わしたい。また今次調査にあつたて三菱電機中津川製作所飯田工場で受けた御便宜の大きかったことを付記したい。

本時報告書は二次にわたる調査の略報というべきで、全調査終了時に本報告書をまとめて出版することになっている。この報告書は今村正次の見解をもとに佐藤が執筆し、製図は中塙悦子に力をわざらわした。なお図のピットの横（中）に付した数字は床面からの深さを印で表わしている。

（佐 藤 駿 信）

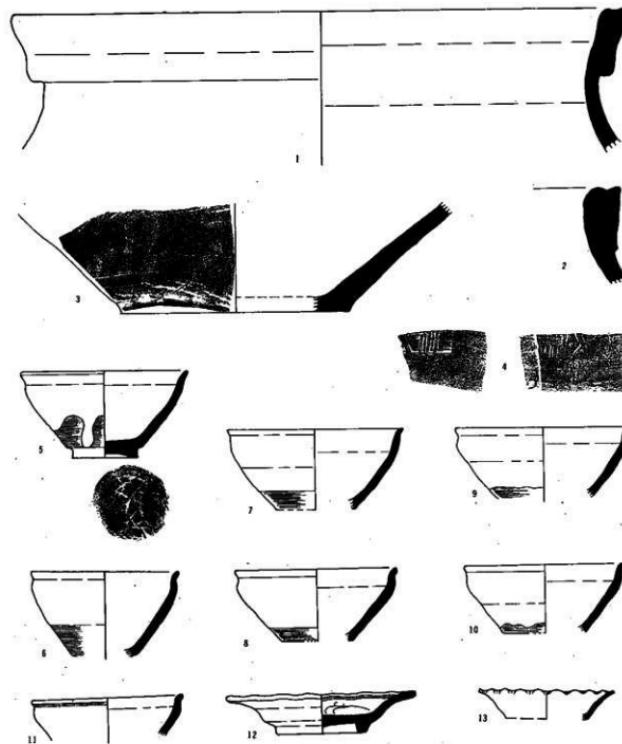


図12 松尾南の原遺跡出土中世遺物I (1 : 3)

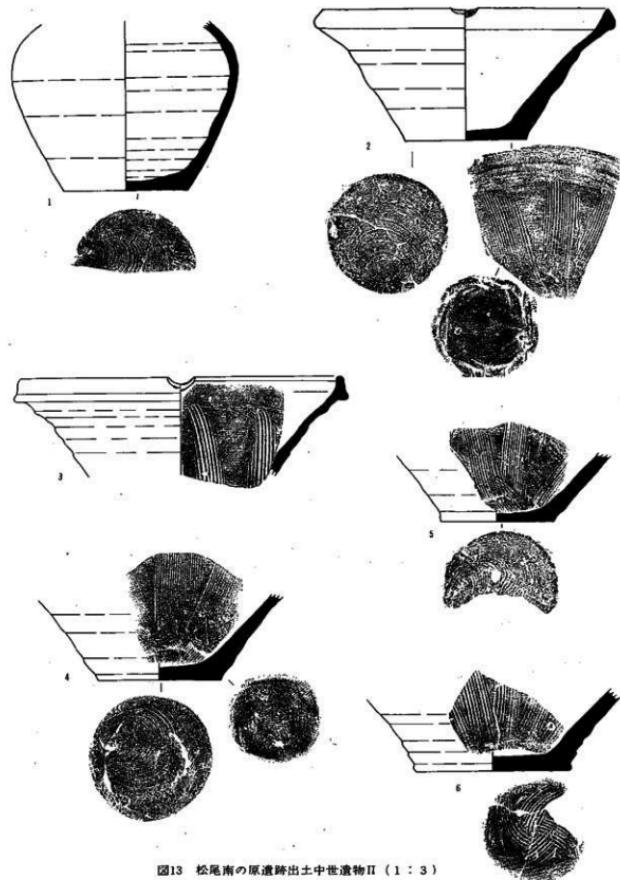


図13 松尾南の原遺跡出土中世遺物II (1 : 3)

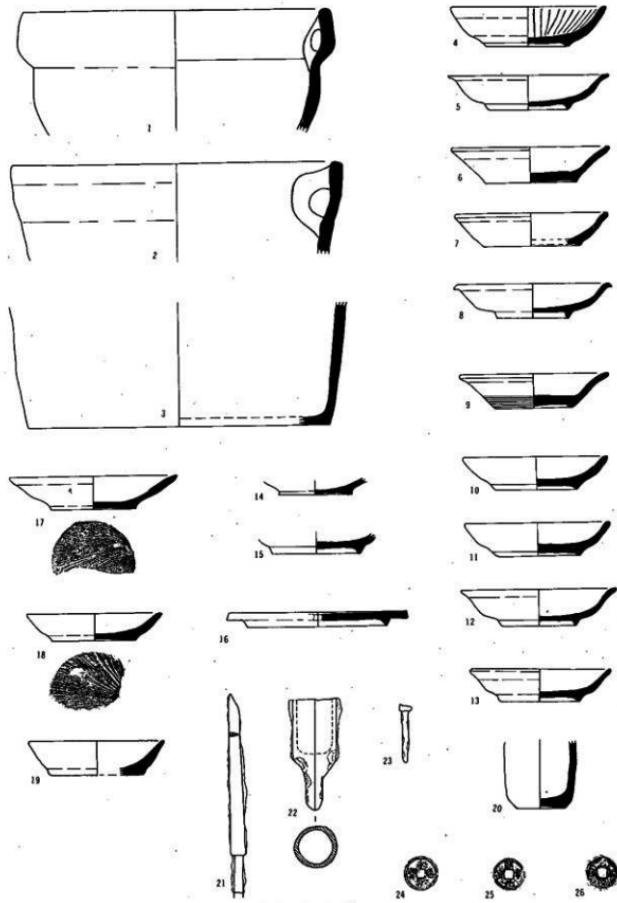


図14 松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅳ (1 : 3)

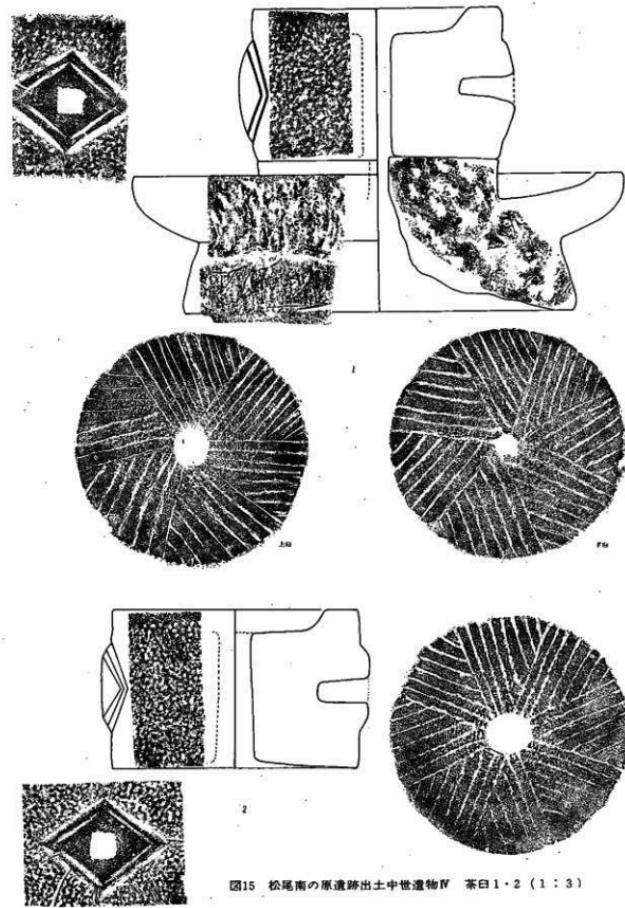


図15 松尾南の原遺跡出土中世遺物Ⅳ 茶臼1・2 (1 : 3)

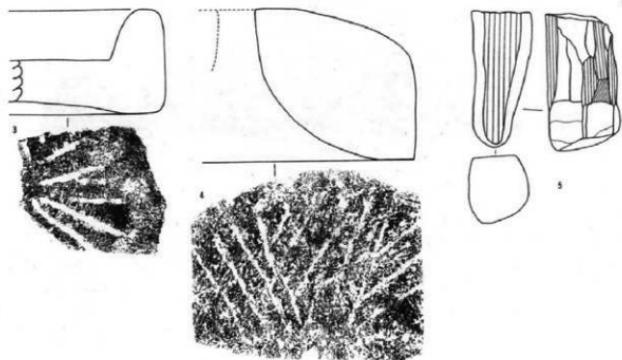


図15 松尾南の原遺跡出土中世遺物VI (1 : 3)

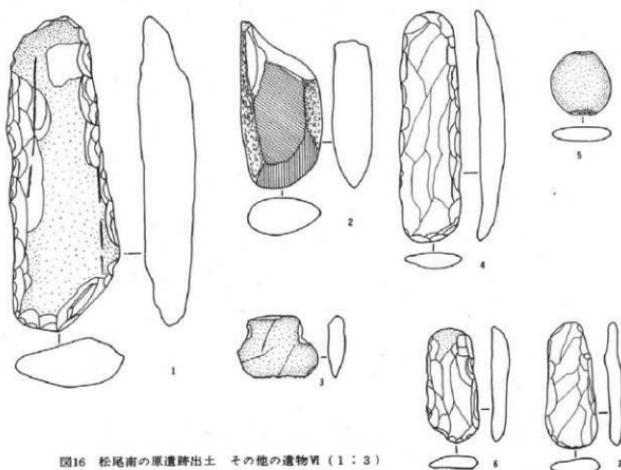
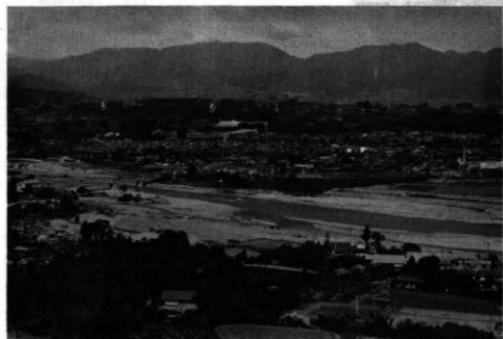
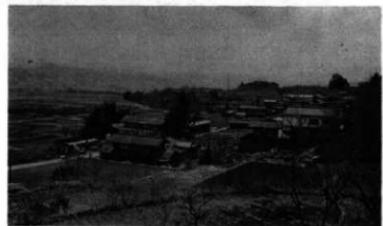


図16 松尾南の原遺跡出土 その他の遺物VI (1 : 3)



遺跡の遠景 1. 南の原 2. 松尾城跡 3. 時岡城跡



遺跡（左）と松尾城跡（右）



遺跡全景 名古熊台地からみた



調査前の遺跡 南からみる



中世屋敷跡 東からみる手前が1号遺構



中世屋敷跡 2号・3号遺構



5号住居址



6号住居址



中世屋敷跡 西からみる



火葬基群



茶臼1号出土



中世屋敷跡 3号遺構(倉庫)



中世屋敷跡 4号遺構



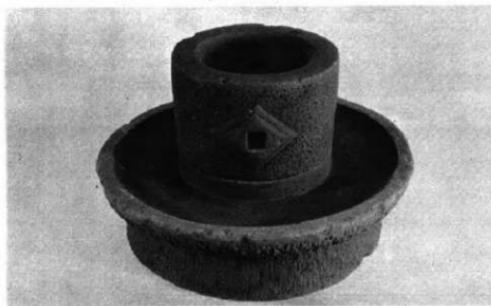
天目茶碗出土



すり鉢出土



天目茶碗



茶臼1号



すり鉢



皿



1974年調査前の遺跡



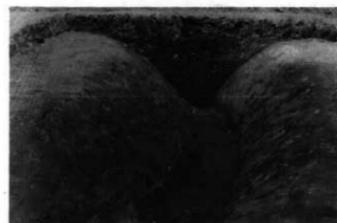
溝I



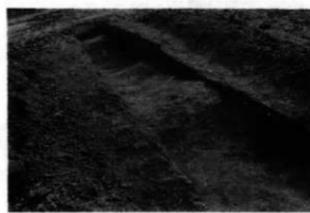
溝I（稻耕畠ともみられる）



溝Iをトレンチで南東への延長をさぐる



溝I 断面



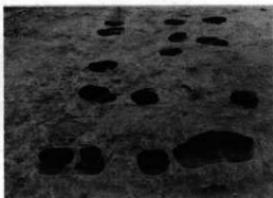
溝IIをトレンチできぐる



7号住居址（屋敷跡もみられる）



柱列址



ピット群



溝団（7号住居址はそれを埋めてつくられている）



9号住居址の1部



8号住居址



茶臼2号と永楽線出土



皿 出土



1972年調査 1



1972年調査 2



1974年調査 1



1974年調査 2



1974年調査 3



1974年遠望
古地上の建物が三菱電機飯田工場

松尾南の原遺跡発掘調査概報

— 中世鐵器跡を中心とした —

1972・1974

三菱電機株式会社中津川製作所
飯田市教育委員会

印刷 飯田市通り町1 (株)秀文社
